

平成 21 年 4 月 30 日現在

研究種目：基盤研究 (B)
研究期間：2006 年度～2008 年度
課題番号：18330190
研究課題名 (和文) 音楽科における教育内容の縮減と学力低下の様相 -諸外国との比較を踏まえた調査研究-
研究課題名 (英文) A study of declining academic achievement under reduction of music education: A comparative research in Asian countries
研究代表者 小川 容子 (Ogawa Yoko) 鳥取大学・地域学部・教授 研究者番号：20283963

研究成果の概要：歴史的研究，調査研究，実験的研究の3分野に分かれて音楽科に求められる「学力」について検討し，音楽学力に関する幅広い議論を積み上げるための基礎づくりをおこなった。歴史的研究では，①戦後の文部省研究指定校や研究実験校，調査協力校に関する報告書・資料集の収集，②調査対象地域及び対象県の選定とフィールドワークを主とした実態把握を中心に研究を進めた。調査研究では，①全国の元音楽教師，現役音楽教師を対象とした質問紙調査の実施，②調査対象者並びに対象グループの選定とインタビューを主とした聞き取り調査の実施を中心に研究を進めた。実験的研究では，①音楽能力調査及び学力検査の追試と分析，②国際比較に基づく児童・生徒の音楽学力の実態把握，③新音楽学力調査問題の開発作成をおこなった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	5,600,000	1,680,000	7,280,000
2007 年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
2008 年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
年度			
年度			
総計	13,600,000	4,080,000	17,680,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：音楽学力，音楽適性，学力低下，音楽学力テスト，学習指導要領

1. 研究開始当初の背景

(1) 小・中学校の教育現場では現行学習指導要領（平成 11 年告示）が示されて以来，子ども達の学力低下について活発な議論が展開されてきたが，この議論の対象となっているのは主要教科に関してであり音楽学力は議論の対象外とされてきた。しかし子ども達の視唱力，読譜力といった基礎的な学力低下に関する危機感は，他教科と同様に音楽でも顕在化している。

(2) 教科「音楽」に山積する諸課題への解決

策を提案するためにはまず，「音楽科において求められる学力とは何か」を具体的に示す必要がある。そのためには，①行政及び教育現場で検討されてきた音楽学力と，②生涯学習として求められている音楽学力の両視点を視野に入れながら，研究を進めなければならない。

2. 研究の目的

(1) 小学校児童を対象とした音楽学力の実態を明らかにする。

- (2)戦後の音楽科の学力観の変遷について歴史的な視点から解明し、現役教師・元教師・研究者・関係諸氏へのインタビュー、国際比較による調査研究をおこなうことにより、音楽学力に関する体系的な理論構築を試みる。
- (3)新音楽適性テストの開発をおこなう。

3. 研究の方法

- (1)歴史的研究、調査研究、実験的研究の3分野の研究成果を有機的に関連させながら、統合しつつ進めた。
- (2)歴史的研究では「音楽学力」及び「基礎・基本」に関する教科書記述の変遷について、文部省指定校となった複数の小学校を対象にフィールドワークをおこなった。報告書や基礎的資料、関連書類の収集をおこない、詳細な資料分析をおこなった。
- (3)調査研究では全国の小学校1600校、中学校1000校を対象に質問紙調査を実施して、最近の子どもと10年以上前の子どもの学力について比較検討した。併せて、調査結果から引き出された個別の課題についてインタビューを主とした聞き取り調査を実施し、詳細な検討をおこなった。
- (4)実験的研究では複数の小学校の授業観察をおこない、その結果をもとに音楽学力テスト（音楽授業によって獲得される学力）と音楽適性テスト（音楽授業以前の生得的な学力）問題の開発作成をおこなった。テスト項目の妥当性・信頼性の検証のために国際比較をおこなった。

4. 研究成果

- (1)フィールドワークを主とした実態把握、学力観に関する種々の報告書及び資料集の収集分析をおこなった歴史的研究の結果、地方によって学力観に対する関心度にかかなりの違いがあること、統一テストの実施等についても行政側に温度差のあることが明らかにされた。
- (2)調査研究では、全国の元音楽教師・現役音楽教師（小学校1600校、中学校1000校）を対象に質問紙調査を実施した。音楽学力がどのように変化しているか、具体的にどの分野で低下（あるいは不足）していると感じているか、また音楽の授業内容へのコメント等についても意見を聴取した。その結果、①小中学校とも全体的な音楽の力はやや不足気味であり、②「楽譜を読む力」が不足していること、③歌のレパートリーが不足していること、④歌声の質の低下などが指摘された。しかし、10年以上前の子供達と比較した結果、音楽の力が低下したと回答している割合は3割弱であり、大多数はあまり変わらないととらえていることも明らかになった。
- (3)実験的研究では、これまでに市販されているさまざまな音楽テストの追試ならびに

問題分析をすると共に、海外の研究者達と意見交換をおこない、新しい音楽学力テストの開発に向けて音楽テスト項目の選出と検討をおこなった。その結果、①テスト項目の選出にあたって音楽適性 (musical aptitude) と音楽学力 (musical achievement) を明確に分ける必要があること、②適性テストの項目はピッチパターン (旋律)、リズム、音色、音高、大きさの5種類が最低限必要であること、③音刺激は西洋音楽のみに偏らないように配慮し、④テスト項目の妥当性・信頼性の検証に関しては国際比較が必要であることが確認された。

これらを踏まえて「新アジア版音楽適性テスト」の作成をおこない、小学生を対象に予備実験を繰り返しながら、各テスト項目それぞれの修正・検討をおこなった。西洋音楽の枠組みだけにとどまらず、日本風音楽、無調風音楽を取り入れた。使用した楽曲はすべて新しく作曲したオリジナルのものであり、演奏楽器として、弦楽器、打楽器、コーラスなど様々なものを使用した。音源作成にあたっては、楽譜作成ソフトウェア「Finale2007」で各楽曲の楽譜を作成し、オーディオファイル (WAVE) で保存したものをもとに編集・加工を行った。

以下、最終版の各項目の問題別の成績を図に示す。

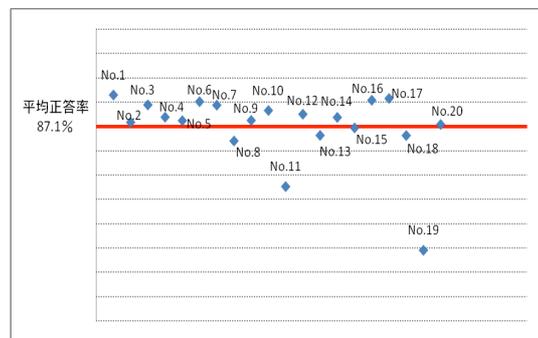


図1 Timbre(音色)の問題別正答率

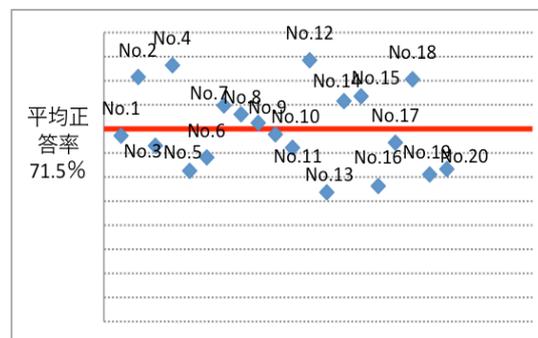


図2 Time(リズム)の問題別正答率

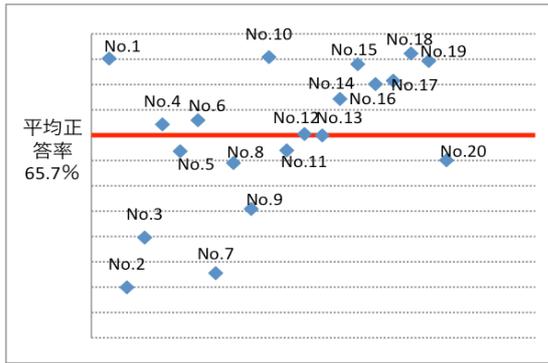


図3 Pitch(音高)の問題別正答率

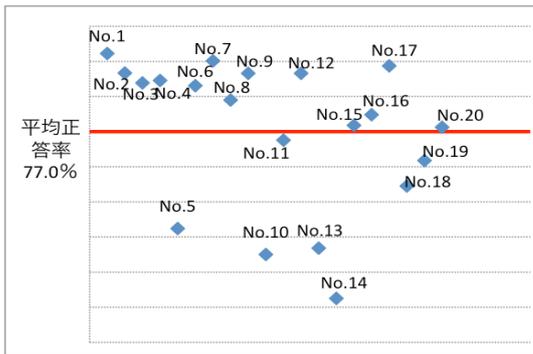


図4 Loudness(音の大きさ)の問題別正答率

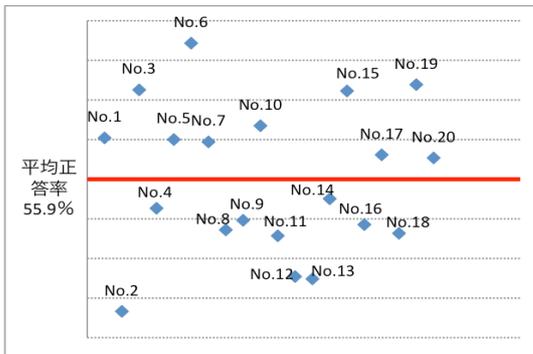


図5 Melody(旋律イメージ)の問題別正答率

被験者となった小学校3年生から6年生の全データの平均値をもとに、各テスト項目のすべての問題(20問)の正答率の分布傾向を調べたところ、図1から図5に示したように問題によって難易度がさまざまであることが明らかにされた。

特に、8分音符や16分音符などの細分化されたリズムの問題や、いろいろな音符が混ざった複雑なリズムの際に、微細なリズムの変化をとらえるのが難しいこと(図2)、微小な大きさの変化をとらえるのが難しく(図4)、また「同異」よりも「似ている」と判断するのはかなり難しかったことが推測できる(図5)。図5に示したMelody(旋律イ

メージ)の問題では、旋律の骨格となる原型(プロトタイプ)を正しく記憶し、提示された旋律と比較しなければならず、骨格以外の装飾音の箇所(位置)や音数、装飾音の動きに惑わされて、原型を見抜くことが難しかったようである。

全問題を通して、低学年よりは高学年の方が成績が良いこと(図6と図7)、男子よりも女子の方が成績得点がやや高く、SDが小さい(分布が狭い)ことが明らかにされたが、学校以外の音楽経験との間にあまり相関が認められず、教師の音楽評価との間にも目立って強い相関が認められなかった(表1)。なお、台湾および香港の児童たちの結果は、問題項目による違いはあるものの、相対的に日本の児童たちとほぼ同じような回答傾向にあることが示された。

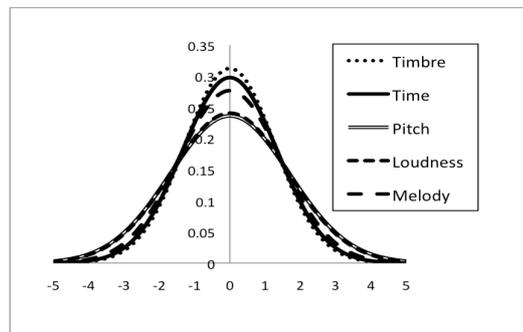


図6 小学3年生各テスト項目の得点分布

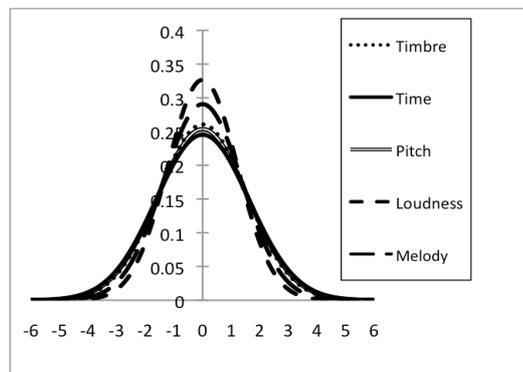


図7 小学6年生各テスト項目の得点分布

表1 音楽適性テストと教師の音楽評価との相関

		Timbre	Time	Pitch	Loudness	Melody	総合
3年生	1組	0.18	0.02	0.12	0.18	0.18	0.22
	2組	0.11	-0.15	0.12	0.16	0.09	0.16
4年生	1組	0.05	0.18	-0.03	-0.16	-0.01	0.02
	2組	0.48	0.14	0.23	0.36	0.19	0.63
5年生	1組	-0.01	0.01	0.16	0.11	0.09	0.13
	2組	0	0.19	-0.11	0.23	0.27	0.26
6年生	1組	0.23	0.41	0.37	0.19	0.37	0.5
	2組	0.08	0.09	0.23	0.01	0.35	0.28

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① Yoko Ogawa, Esther Mang Ho Shun & Hiromichi Mito “Assessment for music aptitudes: Preliminary findings from some children in Asia.” The Proceedings of the 22nd International Research Seminar, pp.237-243. (2008). 査読有
- ② 杉江淑子 「1950-60 年代の学力向上政策と音楽科教育」滋賀大学教育学部教育実践総合センター, 16 巻, pp.111-121. (2008). 査読有
- ③ Yoko Ogawa, Tadahiro Murao & C. Victor Fung “A pilot study in the development of a new music aptitude test for children in an Asian country.” The 6th Asia-Pacific Symposium on Music Education Research CD-ROM (2007). 査読有
- ④ 杉江淑子・嶋田由美・小川容子 「学力論争と音楽教育-音楽科における〈ゆとりの教育〉は子どもたちに何をもたらしたか-」音楽教育学, 36 巻 2 号, pp. 46-58. (2006). 査読有

[学会発表] (計 4 件)

- ① 小川容子 「音楽適性テストから探る子どもの音楽学力-新アジア版音楽適性テストの提案-」第 39 回日本音楽教育学会 (2008). 於国立音楽大学.
- ② Yoko Ogawa, Esther Mang Ho Shun & Hiromichi Mito “Assessment for music aptitudes: Preliminary findings from some children in Asia.” The 22nd International Research Seminar (2008). 於ボローニャ大学 (イタリア).
- ③ Yoko Ogawa, Tadahiro Murao & Esther Mang Ho Shun “Developing a music aptitude test for school children in Asia.” The 10th International Conference for Music Perception and Cognition (2008). 於北海道大学.
- ④ Yoko Ogawa, Tadahiro Murao & C. Victor Fung “A pilot study in the development of a new music aptitude test for children in an Asian country.” The 6th Asia-Pacific Symposium on Music Education Research (2007). 於チュラロン

コン大学 (タイ).

[図書] (計 2 件)

- ① 小川容子 「科学研究費成果報告書 音楽科における教育内容の縮減と学力低下の様相-諸外国との比較を踏まえた調査研究」(2008). 総ページ数 127 頁.
- ② 杉江淑子 「教師調査班 教科「音楽」の授業内容と学力に関する調査」(2007). 総ページ数 61 頁.

[産業財産権]

- 出願状況 (計 0 件)
- 取得状況 (計 0 件)

[その他]

- ① 小川容子 「Musical Aptitude Test CD 5 枚組」(2007).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小川 容子 (OGAWA YOKO)
鳥取大学・地域学部・教授
研究者番号: 20283963

(2) 研究分担者

嶋田 由美 (SHIMADA YUMI)
和歌山大学・教授
研究者番号: 60249406
杉江淑子 (SUGIE YOSHIKO)
滋賀大学・教育学部・教授
研究者番号: 30172828
林 睦 (HAYASHI MUTSUMI)
滋賀大学・教育学部・講師
研究者番号: 40402698
村尾忠廣 (MURAO TADAHIRO)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号: 40024046

(3) 連携研究者

なし